



中国の社会主義
文化大革命

(第六集)

北京 外文出版社

中国の社会主義文化大革命

(第六集)

外文出版社

北京

目次

中国社会主義革命の新段階……………	『人民日報』社説（一九六六年七月十七日）…	5
党の陽光は文化大革命の道を照らす……………	『人民日報』社説（一九六六年六月二十四日）…	10
大衆を信頼し、大衆に依拠しよう……………	『紅旗』社説（一九六六年第九号）…	16
大衆のなかから大衆のなかへ……………	『人民日報』社説（一九六六年七月二十一日）…	22
まず大衆の生徒になり、そのあとで大衆の先生になる……………	『人民日報』社説（一九六六年七月二十九日）…	26

中国社会主义革命の新段階

『人民日報』社説

(一九六六年七月十七日)

いまくりひろげられているプロレタリア文化大革命は、わが国の社会主义革命を、あらたな段階、つまり、いっそう深まり、いっそう広まる段階におしすすめた。

△九五二年の三反(国家机关の公務員の汚職、浪費、官僚主義に反対するⅡ訳注) 五反(資本家の贈賄、脱税、国家資財の窃取、手間ぬきと材料のごまかし、国家の経済情報の窃取に反対するⅡ訳注) 運動は、中華人民共和国の成立後、プロレタリアートが党の指導のもとに、ブルジョアシーと党内外におけるその代表者に対するおこなった大闘争の最初の段階である。この段階の闘争の特徴は、ブルジョアシーの反動的人物がいく百千万の人民が窮乏のどん底におちいるのもかえりみず自分のボロもうけのためにあらゆる手をつくして国家の財産を横領したその正体を、広範な大衆のなかであばき出したことにある。

三反五反闘争の基礎と農業協同化の基礎のうえに立って、党は資本主義的工商業の社会主义的改造、つまり生産手段の資本主義的所有制にたいする改造を比較的順調におこなった。これが闘争の第二段階である。

5 闘争の第三段階は、一九五七年に党がおこなったブルジョア右派に反対する闘争である。この闘争は、ブルジョ

ア右派がわれわれの国家の指導権を乗っ取り、プロレタリアート独裁をくつがえし、かれらのいう「交代で胴元をつとめる」やり方を実行して、反革命の独裁をうち立てようとしたその陰謀を粉砕した。

一九五七年の反右派闘争のあと、ブルジョア右派は比較的隠蔽した方法を取り、時機を待って行動をおこそうとした。われわれが一時的な経済困難にみまわれた時期に、かれらは党内の右翼日和見主義者と結託して、たがいに呼応し、党の総路線、大躍進、人民公社に反対して、都市と農村で資本主義復活の「大逆転」をおこそうとくわだてた。党は、右翼日和見主義に反対する闘争をおこない、党の総路線と社会主義制度をまもる一連の政策と措置を講じて、ブルジョア右派と党内外におけるその代表者のたくらみを失敗させるとともに、わが国の国民経済と文化・教育をさらに一步発展させた。これが闘争の第四段階である。

闘争の第五段階は、一九六三年に党の提起した社会主義教育運動からはじまって、さいきん提起されたプロレタリア文化大革命の偉大な呼びかけにいたるまでの段階である。このプロレタリア文化大革命は、実際にははじまったばかりであるが、すでにその偉大な、深遠な意義ははっきりと示されている。

中華人民共和国の成立いらい、プロレタリアートの思想、プロレタリアートの学術、プロレタリアートの文学・芸術は、広い範囲にわたって、文化の陣地にはいりこんでいった。解放直後、われわれは、公然とした反革命のものをのぞいて、ふるいブルジョア知識人を全部そのままかかえこんだ。かれらに祖国のために仕事をさせ、仕事のなかで自分に自分のブルジョア知識人を改造させ、プロレタリア世界観をうけいれさせていくというのが、党の政策であった。だが、ブルジョアの世界観はふるい知識人のあいだに深く根をはっているものである。かれらは、ふるい社会の基礎と無数のつながりをもっている。プロレタリア世界観をうけいれること

は、かれらにとつて、あたまをきり換える問題であり、たいへん苦しいことであつて、なかなか容易なことではない。

ふるい知識人のあたまのなかでは、プロレタリア世界観がそこを占領するまでは、かれらがもたらもつていたブルジョア世界観やブルジョアの世界観の旧思想、旧習慣があいかわらず作用をつづけ、つねに政治生活その他の面でがん強に自己を主張して、なんとかしてその影響をひろげようとするものである。かれらはつねに地主階級、ブルジョアの世界観で世界を改造しようとするものである。

反動的な権力がうち倒され、地主階級、ブルジョアの世界観の所有制がくつがえされたので、地主階級、ブルジョアの世界観の反動分子はなんとかして復活の希望を思想の分野の闘争にかけようとする。かれらは、搾取階級の旧思想、旧習慣で大衆を征服し、人の心をまどわし、地主階級、ブルジョアの世界観の復活の目的をとげようとする。

したがって、結局のところ、プロレタリア世界観とブルジョア世界観との闘争は、実際には、社会主義制度とすべての搾取制度との闘争であり、プロレタリアートとブルジョアの世界観との指導権争奪の闘争であり、一方はプロレタリアート独裁をうちかためようとし、他方はプロレタリアート独裁をブルジョアの世界観に変えようとするこの両者の闘争である。

毛沢東同志は十年まえに英明にもつぎのように指摘した。「プロレタリアートとブルジョアの世界観との階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリアートとブルジョアの世界観とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、やはり長期にわたる、曲がりくねったたたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。プ

ロレタリアートは自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとし、ブルジョアも自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。この面では、社会主義と資本主義とのあいだの、どちらが勝ち、どちらが負けるかの問題は、まだほんとうには解決されていない」と。(プロレタリア文化大革命は、大衆の自覚に依拠し、大衆がみずから自己を教育するという方法に依拠して、毛沢東同志の提起した、イデオロギーの分野でどちらがどちらに勝つかという問題をしたいに解決しようとするものにはかならない。)

われわれが社会主義の各戦線で勝利すればするほど、われわれの社会主義事業が発展し、強固になればなるほど、イデオロギーの分野におけるプロレタリアートとブルジョアとの矛盾、衝突はいよいよきわだつてくる。プロレタリア文化大革命がいまわれわれの重要な日程にのぼされているのは、つまり、このためにかならない。これは客観的法則である。この矛盾、衝突をさけようとしても、それは不可能である。プロレタリアートが最終的な勝利をおさめるには、いつでも、イデオロギーの分野におけるブルジョアすべての挑戦に痛烈な反撃をくわえなければならない。

いかなる事物も、矛盾のなかにおかれており、闘争のなかにおかれており、変化のなかにおかれている。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の基本点は、批判をし、闘争をし、革命をすることにある。闘争こそ生活であり、もしこちらがたたかわなければ、相手がたたかいかいをしかけてくる。革命的な警戒心をうしない、階級敵、階級的異分子と断固たたかわらないなら、それはマルクス・レーニン主義者ではない。

われわれ一人ひとりの共産党員、一人ひとりの革命的幹部、そしてまた社会主義制度とプロレタリアート独裁を擁護する一人ひとりの同志は、この文化大革命のなかでいっそう高く毛沢東思想の偉大な赤旗をかかげ、毛主

席の著作を實際と結びつけて学び、運用することにつとめ、いっそうりっぱにプロレタリア・イデオロギーを身につけ、共産主義思想を発展させ、共産主義的自覚を高め、共産主義的大志をうちたてなければならぬ。けっして自分の現状に満足してはならず、闘争のなかから学び、闘争のなかから教訓をくみとることに長じなければならぬ。このようにすれば、われわれは社会主義革命のこの新しい段階で不敗の前進をつづけることができる。

党の陽光は文化大革命の道を照らす

『人民日報』社説

(一九六六年六月二十四日)

史上かつてないわが国の現在のプロレタリア文化大革命は、党と毛主席の正しい指導のもとに、いま一步一步と勝利をおさめつつある。

毛主席は、「われわれの事業を指導する核心的な力は中国共産党である」とのべている。

中国人民のすべての事業、すべての闘争は、中国共産党の指導のもとでのみ、勝利をおさめることができる。

「三つの大きな山」(帝国主義、封建主義、官僚資本主義)をくつがえした民主主義革命は、中国共産党の指導のもとで勝利をおさめたものである。

社会主義革命と社会主義建設のすべての偉大な成果は、中国共産党の指導のもとでかちとられたものである。

プロレタリア文化大革命も、中国共産党の指導のもとでのみ、勝利をおさめることができる。

要するに、中国共産党の指導がなければ、われわれの祖国を富みさかえた、強大なものにし、人による人の搾取のない偉大な社会主義制度をうち立てようとしても、それはまったく不可能であり、純然たる幻想にすぎない

のである。

わが党は、全党の団結と革命の思想的基礎としての偉大な無敵の毛沢東思想をもち、毛主席を中心とする党中央の強固な指導をもっている。

わが党は、毛主席の党建設の思想とその革命的風格にもとづいてうち立てられたプロレタリア革命政党であり、理論と実践をむすびつけ、大衆と密接なつながりを持ち、自己批判の精神をもったプロレタリア革命政党である。

わが党は、国内外の強大な敵との闘争、党内のさまざまな日和見主義との闘争のなかで発展し、拡大し、強固になつた党であり、長期にわたる革命闘争のきびしい試練を経てきた党である。

わが党は、毛沢東思想にみちびかれて、世界史上にほとんど例を見ないいくたの苦難をのりこえ、はげしい風波のなかをたくみに暗礁をよけて、つぎつぎと勝利をかちとってきた党である。

わが党は、人民大衆のあいだに、きわめて大きなゆるぎない威信をもっている。わが党はプロレタリアートと広範な勤労人民の最高の利益を代表しており、人民大衆との関係は、毛主席ものべているように、水魚の間柄である。

したがって、わが党は偉大な党、光榮ある党、正しい党と呼ばれるのに恥じない党である。

党中央と毛主席の指導のもとに、わが党の各級組織、わが党員、わが党の幹部は、大多数が立派であつて、プロレタリアートに忠実であり、共産主義の事業に忠実であり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に忠実である。一部の党員、一部の組織にはさまざまな程度の欠点や誤りがあるが、しかし、かれらの多くは、党と大衆の

援助、教育、監督のもとに、批判と自己批判によってそれを改めることができる。

社会主義革命と社会主義建設の時期には、階級闘争は依然としてひじょうに激烈であり、社会主義と資本主義の二つの道の闘争はきわめて先鋭、かつ長期にわたるものである。社会におけるこのような階級闘争、二つの道の闘争が党内に反映するのはきけられない。マルクス主義者にとって、これは決して不思議なことではなく、正常な、法則にかなった現象である。

わが党内には、党と社会主義に反対するひとにぎりのブルジョアジーの代表者がいる。かれらは、もぐりこんできた階級敵であるか、まるめこまれた墮落変質分子である。かれらは、一部の組織と部門の指導権を乗っつた。こうした状況は、これまでもあったし、いまもあるし、将来もあるだろう。党が大衆を立ちあがらせて、かれらをあばき出し、かれらを罷免し、かれらの職権をうばい、断固としてかれらを一掃できるということ——これは、わが党のがん強な戦闘力を物語り、わが党の団結と強固さを物語るものにほかならない。

プロレタリアートの文化大革命は、ブルジョアジーとすべての搾取階級のイデオロギーの息の根をとめようとするものである。毛主席ものべているように、これは人びとの魂にふれる大革命である。この文化大革命は、社会における激烈な階級闘争であるばかりでなく、党内においても、思想のうえで入党していないもの、あくまでブルジョア思想にしがみつくものの抵抗をうけるのは必至である。

文化大革命にたいする態度は、社会のすべての人びとにとって、プロレタリアート独裁と社会主義制度を擁護するかどうかの試金石である。

すべての党組織、すべての共産黨員も、この文化大革命のなかで試練をうけるであろう。

毛沢東思想で武装した中国共産党の指導は、プロレタリア文化大革命が勝利する根本的な保証である。

党の正しい指導があつてこそ、文化大革命は正しい方向をもつことができ、革命的人民はあたまも目もはつきりさせることができ、運動は健全に発展することができる。

党の正しい指導とは、大衆のなかから大衆のなかへという大衆路線をとることに長じること、また、大衆と相談し、大衆の意見に耳をかたむけ、是非を見わけ、区別して対処することに長じることである。

党の正しい指導とは、確固としたプロレタリア革命派に依拠し、左派の隊列を拡大し、最大多数のものを獲得し、少数のものを孤立、分化させ、力を集中して、あくまで党と社会主義に反対するわずか数パーセントの反革命分子に打撃をあたえることである。

党の正しい指導とは、たえず大衆のプロレタリア的政治的自覚をたかめ、大多数の人びとにたいして団結——批判——団結の政策をとり、運動を通じて、最後には、誤りをおかしたがるが、改めたいと思ひ、誤りをもとめた党内の人びとをもふくむ九五パーセント以上の人びとを団結させることである。

すべての立派な黨員、立派な幹部、立派な党組織は、勇敢にこの革命に参加し、一段と毛沢東思想で自分を武装し、この文化革命の大衆運動をりっぱに指導しなければならぬ。すべて、運動の先頭に立ち、大衆の積極性を水をかけたりしてはならない。

われわれの各級党組織の一部の指導的幹部は、反党・反社会主義でないかぎり、身軽ないでたちでたたかいたるべきである。自分にいくらか欠陥や誤りがあれば、勇敢に自分を点検し、虚心に大衆の批判をうけいれるべきである。大衆が何枚か大字報を書き、いくらか意見を出したからといって、不満をしめしたり、腰ぐだけに

なったりしてはならない。

われわれの党と人民大衆は、偉大な毛沢東思想を指針としていることに誇りをもち、毛沢東思想で武装した党中央の指導をうけていることに誇りをもっている。

社会主義の時期における階級、階級矛盾、階級闘争についての毛主席の学説は、マルクス・レーニン主義をあらたに発展させたものであり、くりかえし試練をうけて立証されたプロレタリア革命の真理であり、絶対にくずれることのないプロレタリア革命の科学である。このプロレタリア革命の科学は、われわれの社会主義革命と社会主義建設の実践のなかで発展したものであり、わが党および各国のマルクス・レーニン主義者と帝國主義、現代修正主義との闘争のなかで発展したものであり、ソ連のフルシチョフ一味が党と軍隊と政府を乗っ取って、ソ連を社会主義制度から資本主義の復活へとみちびいた、あの重大なにがい教訓をくみとるなかで、発展したものである。

わが国のプロレタリア文化大革命のなかでの階級闘争、またこの階級闘争のなかであばき出されたいく百千万の事実は、社会主義の時期における階級、階級矛盾、階級闘争についての毛主席の学説の正しさを一段と立証している。

この文化大革命のなかで、われわれは、この客観法則を反映した毛主席の学説にもとづいて闘争をすすめる、人びとの主観的世界と客観的世界を改造し、それによって、わが国の社会主義革命と社会主義建設をいっそう立派におしすすめる、将来、わが国が社会主義から共産主義へ移行することができるようにしなければならない。

毛沢東思想と党中央の指導の陽光は、わが国プロレタリア文化大革命の道を照らしている。

あくまで毛沢東思想にもとづいて事をはこび、党中央と毛主席の指示にもとづいて事をはこび、運動にたいする党の正しい指導をつよめ、党の指導を広はん大衆と密接にむすびつけさえすれば、われわれはどのような敵も打ちまかすことができる。

すべての妖怪変化のたぐいは、毛沢東思想の陽光をのがれることができず、党の陽光をのがれることができない。すべての妖怪変化は、毛沢東思想と党の陽光に照らし出され、自覚したいく百千万大衆の目に射すくめられては、どんなにうまく立ちまわり、是非を転倒させ、火事場どろぼうをきめこみ、思想の混乱をつくり出そうとしても、それは絶対にできるものではない。かれらがごまかしの手をつかかって逃げのび、失敗の運命からのがれようとしても、それはなおさら絶対にできるものではない。

大衆を信頼し、大衆に依拠しよう

『紅旗』社説

(一九六六年第九号)

プロレタリア文化革命の偉大な大衆運動が、いま、全国におこりつつある。いく百千万の革命的大衆が、党中央と毛主席の呼びかけにこたえて、なにもものはばまれぬすさまじい勢いで、反党・反社会主義のブルジョアジーの代表者にたいしするどい闘争をくりひろげている。妖怪変化のたぐいは、広範な大衆のはてしない大海のような重囲のなかにおちいって、かつてない手痛い打撃をうけている。

広範な大衆を立ちあがらせ、大衆運動の方法によってプロレタリア文化大革命をおしすすめること、これはかつてない偉大な壮挙である。

いく百千万の人民大衆が立ちあがって旧世界を批判している。これが、今回のプロレタリア文化大革命の根本的な特徴である。

毛主席は、「革命戦争は大衆の戦争であり、戦争をするには大衆を動員する以外になく、戦争をするには大衆に依拠する以外にない」とわれわれに教えている。

これは普遍的な真理である。革命戦争がそうであり、プロレタリアートのすべての事業がそうであり、いうま

でもなく、プロレタリア文化大革命もそうである。大衆運動がなければ、プロレタリア革命はありえない。同様に、大衆運動がなければ、プロレタリア文化大革命もありえない。

以前、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の支配をくつがえす革命戦争をすすめたとき、わが党は広範な人民大衆に依拠した。国民党反動派の支配する旧中国をたおし、プロレタリアート独裁の新中国をうち立てたのは、ほかでもなく、毛主席の指導のもとで組織された広範な人民大衆であった。こんにち、人びとの魂にふれるプロレタリア文化大革命をすすめるばいにも、わが党はやはり広範な人民大衆に依拠しなければならない。鉄砲で旧世界を批判するにせよ、ペンで旧世界を批判するにせよ、すべて人民大衆に依拠しなければならない。

プロレタリア文化大革命は、大衆の革命事業である。プロレタリア文化大革命の全過程をつうじて、大衆に依拠し、思いきって大衆を立ちあがらせなければならない。大衆を動員して、大いに大衆運動をおこし、大字報を出させ、大いに意見を出させ、大いに討論させてこそ、プロレタリア文化大革命を広く深くくりひろげることができ、すべての妖怪変化をあばき出し、うち倒すことができ、イデオロギーの分野におけるプロレタリアートとブルジョアジーのどちらがどちらに勝つかという問題を真に解決して、プロレタリア文化大革命の任務を勝利のうちになしとげることができるのである。

歴史はすでに、広範な革命的大衆が反動的な国家機構の埋葬者であり、反動的な社会制度の埋葬者であることを、立証している。歴史はまたかならず、広範な革命的大衆がすべての搾取階級のイデオロギーの埋葬者であることを、立証するであらう。

広範な人民大衆のなかには、文化革命にたいするきわめて大きな積極性がひめられている。ここ数年らい、革

命的幹部と革命的知識人、とくに広範な労働兵大衆は、毛主席の著作を実際と結びつけて学び、運用して、大きな成果をおさめてきた。かれらは、毛沢東思想を身につけている。かれらは、階級闘争、生産闘争、科学実験のなかで、毛主席の著作をりっぱに運用している。かれらは、当面のプロレタリア文化大革命のなかでも、毛主席の著作をりっぱに運用している。かれらは、プロレタリアート独裁をまもる真の金城鉄壁である。かれらは、ブルジョアジーの代表者が巣くう思想・文化の陣地をたたきつぶす主力部隊である。この点をもし過小評価するならば、ひじょうに大きな誤りをおかすことになる。

ここ数ヵ月らい、怒とうのような勢いですすめられているプロレタリア文化大革命の運動は、つぎのことを立証している。

毛沢東思想を身につけた広範な人民大衆は、妖怪変化を見わけるとも大きな力をもっている。かれらは、もつともよく見ぬき、もつともよく見通す。

毛沢東思想を身につけた広範な人民大衆は、妖怪変化ともつともりっぱにたたかう。かれらは、もつとも的確にねらいをさだめ、もつとも手きびしく打撃をあたえる。

毛沢東思想を身につけた広範な人民大衆は、もつとも上手に闘争をすすめ、もつとも上手に事実をあげて道理を説くというやり方でブルジョアジーの代表者を徹底的に論破する。

ここ数ヵ月らい、怒とうのような勢いですすめられているプロレタリア文化大革命の運動は、つぎのことを立証している。

毛沢東思想で武装した中国共産党の指導は、プロレタリア文化大革命が勝利をおさめる根本的な保証である。

党の正しい指導とは、大衆路線をりっぱにおしすすめることであり、はじめから終りまで、思いきって大衆を立ちあがらせることを運動の根本とすることである。大衆を信頼し、大衆に依拠することは、わが党のかぎりない力の源泉である。大衆を信頼し、大衆に依拠し、思いきって大衆を立ちあがらせ、大いに大衆運動をおこすことは、プロレタリア文化大革命をおしすすめるためのわが党のきわめて重要な方針である。

大衆を信頼し、大衆に依拠するかどうか、思いきって大衆を立ちあがらせる勇氣があるかどうか——これは、プロレタリア世界観とブルジョア世界観の分水嶺であり、真のマルクス・レーニン主義政党とすべての修正主義政党との根本的な区別でもある。わが党に力があるのは、大衆を信頼し、大衆に依拠し、思いきって大衆を立ちあがらせる勇氣があるからである。大衆運動の先頭に立ち、思いきって大衆を立ちあがらせてこそ、プロレタリア文化大革命のなかで指導的な役割を發揮することができるのである。そうではなくて、大衆をおそれ、大衆運動をおそれるなら、指導などまったくお話にならず、毛主席がつねにわれわれに教えている党の指導の原則にそむくことになる。

毛主席は、プロレタリア文化大革命では、プロレタリアートの左派の隊列を組織し、発展させるとともに、かれらに依拠して大衆を立ちあがらせ、大衆と団結し、大衆を教育しなければならぬ、とわれわれに教えている。

全国の各地には、いたるところに、確固としたプロレタリアートの革命的左派がいる。圧倒的多数の共産黨員、共産主義青年団員は、信頼できる人たちであり、かれらは、党の正しい指導のもとでプロレタリアートの革命的左派の中枢となっている。

プロレタリアートの革命的左派は、もつともよく党の話を聞き、もつともよく毛主席の話を聞き、革命のなかでもつとも勇敢であり、もつとも断固としており、もつとも上手に多数のものと団結することができ、闘争のなかで模範的な役割をはたすことができる。かれらは、今回のプロレタリア文化大革命の前衛である。

わが党は、各地方、各部門の確固とした左派に依拠しなければならぬ。われわれは、地位、経歴、年齢などの誤ったワクにしばられてはならず、確固とした左派を組織して運動の骨幹にし、大胆に、思いきって、かれらにプロレタリア文化大革命のなかで先頭に立つ役割をはたさせなければならない。

確固とした左派に依拠し、思いきって大衆を立ちあげさせてこそ、はじめて毛主席と党中央の指示を真に貫徹することができ、真の革命とニセの革命、革命と反革命を見わけることができ、プロレタリア文化大革命を指導して運動を健全に発展させることができるのである。

毛主席は、指導と大衆の結合は党の指導方法の根本原則である、とわれわれに教えている。われわれは、プロレタリア文化大革命のなかでもこの原則を堅持しなければならない。

大衆路線は、すべての工作における党の根本路線である。人民大衆は、われわれのすべての革命工作の力の源泉である。人民大衆に依拠すれば、われわれはすべての困難を克服して、すべての敵にうち勝ち、すべての工作をりっぱにやりとげることができる。人民大衆から離れば、われわれは源のない水、根のない木となり、なにごともしなげられなくなる。毛主席は、「われわれが人民に依拠し、人民大衆の創造力が無限であることをかたく信じて、人民を信頼し、人民ととけあいさえすれば、いかなる困難も克服できるし、いかなる敵もわれわれを圧倒することができず、われわれに圧倒されるだけだということを、一人ひとりの同志に理解させるべきであ

る」とのべている。偉大なプロレタリア文化大革命のなかで、われわれはかならず、毛主席の指示にしたがって、大衆を信頼し、大衆に依拠し、思いきって大衆を立ちあげさせ、人民大衆ととけあって、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬかなければならない。

大衆のなかから大衆のなかへ

『人民日報』社説

(一九六六年七月二十一日)

毛沢東同志は、「わが党のすべての実際活動において、およそ正しい指導は、大衆のなかから大衆のなかへ、でなければならぬ」とのべている。プロレタリア文化革命の活動も同様である。

文化革命の運動のなかで、ある組織がその活動をりっぱにやっているのは、その責任者が毛沢東同志の教えにもとづいて、運動の先頭に立ち、思いきって大衆を立ちあがらせ、大胆に大衆をあげまして大字報をはり出させ、大いに意見を出させ、大いに討論をおこなわせ、大衆を指導してすべての妖怪変化を一掃する戦闘のなかに突入させているからである。

こうしたりっぱな責任者は、まず大衆の生徒になり、そのあとで大衆の先生になるということができるのである。

かれらは、よく聞き、よく見、よく考え、大衆の意見によく耳をかたむけることができる。

かれらは、自分の活動の欠点や誤りにたいしては、それを大胆にみんなの前にもちだして、批判を求めぬ。

かれらは、けだかい共産主義の風格をそなえており、大衆が自分を暴露し、批判する大字報をはり出すことに

たいして、これを喜んでうけいれる態度をとる。

だからこそ、かれらは大衆の信頼をかちとつたのであり、活動の主動権、発言権、指導権をかちとつたのであり、また、運動をりっぱに指導できたのである。

だが、一部の組織の責任者はそうではない。かれらは、口先では竜がすきだといながら実際には竜を恐れたあの葉公のように、口先では大衆路線をとえながら、いざ大衆が立ちあがると、恐れてしまう。かれらは、あれも恐れ、これも恐れて、大衆の革命的烈火が自分の身に燃えうつりはしないかと恐れ、自分のわずかばかりのしつぽが大衆につかまればはしないかと恐れる。だが、その実、ありふれた誤りをおかしたこれらの同志は、大胆に自分の欠点と誤りを直視し、誠意をもって真剣に自己批判をおこない、虚心に大衆の批判をうけいれ、行動のうえで誤りをあらためる決意と行動をしめしさえすれば、大衆に了解してもらえらるし、歓迎してもらえらるのである。

ほかの少数の人たちは、大衆にたいして役人風やだんな風を吹かし、自分を大衆のうえにしている。かれらは、大衆の意見をあたamarca聞こうとしない。そして、大衆からなん枚か大字報をはり出されると、もう我慢ができなくなる。はなはだしいばあには、さまざまな口実をつかって大衆運動をおさえつけたり、腹いせをするために大衆に打撃をくわえたりする。これでは、文化革命を指導することはできないし、その日その日をやつていくこともできなくなり、あげくのはては、大衆から見すてられてしまうだけである。

毛沢東同志は、「われわれのすべての幹部は、その職務上の地位の高低をとわず、すべて人民の勤務員であり、われわれのやることは、すべて人民に奉仕することである」とのべている。

共産党員はけっしてブルジョアジーのどんなような態度で大衆に接してはならない。プロレタリア文化大革命は、ほかでもなく、そうしたブルジョアジーのどんなにもにたいする革命である。もしも共産党員が虚心に大衆にまなぼうとせず、大衆にたいして役人風をふかすなら、どこに共産党員らしさがあるだろうか。それは、ぜんぜん共産党の作風ではなく、国民党の作風である。

毛沢東同志は延安にいたころ、共産党の作風とはどのようなものであり、国民党の作風とはどのようなものであるかをはっきり区別しなければならぬ、とのべたことがある。われわれ共産党の作風とは、大衆と密接に結びつき、大衆に学び、ひたすら人民に奉仕し、自分の欠点や誤りにたいしては、まいにち顔を洗い、まいにち掃除をするようにつねに自己批判をすることである。国民党の作風とは、大衆から浮きあがり、大衆のうえにあぐらをかき、大衆をいじめつけることである。

毛沢東同志は、共産党員は絶対に国民党の作風をとどめてはならず、官僚主義や軍閥主義のほこりをとどめてはならない、とのべている。

共産党の作風とはどのようなものであり、国民党の作風とはどのようなものであるか、大多数の共産党員ははつきりとそれを区別できる。ところが、一部の人がとは、ときにははつきりと区別できるが、ときにははつきりと区別できない。また、ある問題についてははつきりと区別できるが、他の問題についてははつきりと区別できない。共産党員が共産党の作風と国民党の作風の境界さえはつきりと区別できないとしたら、それこそつとも危険なことであり、そんなことでは、見当ちがいの隊列にはいり、革命的な大衆運動の反対の側に身をおくことになる。

どのような革命の道もすべて、まっすぐなものではなく、なだらかなものではない。それは、つねにまがりくねった、でこぼこしたものである。プロレタリア文化大革命のような、人びとの魂にふれるこの大革命、きわめて先鋭で、きわめて複雑な、しかもきわめて深刻なこの階級闘争では、運動の過程でいくらかの欠点と誤りが生まれ、いくらかの曲折があらわれるのは、どうしてもさけがたい現象である。問題は、運動を指導する活動をもつとりつばにやりとげ、運動をもつと健全に発展させて、誤りや曲折をできるだけ少なくするようにつとめることである。

はたしていつそりつばにやれないだろうか。完全にやれる。それには、毛沢東同志が提起した党の大衆路線をつらぬき、思いきって大衆を立ちあがらせる方針を堅持することである。

プロレタリア文化大革命の発展があまりにも急速で激しいために、心がまえのできていない人も少なくない。共産党員の一人ひとりには、この大革命のなか、大衆闘争の烈火のなかで試験をうけなければならない。かれらは、自分が人民大衆の忠実な勤務員であり、たしかに毛沢東同志の教えをすべての行動の最高の指示にしていることを、自分の行動によって証明しなければならない。

まず大衆の生徒になり、そのあとで大衆の先生になる

『人民日報』社説

(一九六六年七月二十九日)

毛沢東同志は、「全党の同志たちとともに大衆に学び、これからも小学生となること、これがわたしの願いである」といつている。われわれの偉大な指導者毛主席の大衆に学ぶこのような謙虚な態度は、われわれ共産党員の手本である。

プロレタリア文化革命の運動の指導にあたる人びとはみな、大衆を師と仰ぎ、大衆に教えるを請い、大衆の小学生にならなければならない。このようにする人は、状況がはっきりし、決意が大きくなり、方法が正しいものとなる。そして、大衆は比較的十分に立ちあがり、運動は比較的健全に発展する。

まず大衆の小学生になることをしないで、みずから「勅使」をもって任じ、「お着きになるやさつそく」なんだかんだと論議をして主観的に基調を定め、わくをつくるならば、大衆の手足を縛り、大衆の積極性をそこなうことになる。

まず大衆の小学生になることをしないで、部屋のなかに閉じこもって号令をかけるならば、二つの目はぼうつとなり、是非の区別がはっきりせず、敵味方の区別がはっきりせず、肝心な問題がつかめない。これでは、運動

を正しく指導できなくなり、運動を妨げることになる。したがって、共産党員の一人ひとりみな、毛沢東同志の教えたがって、「鼻もちならない気取りをすてて、よるこんで小学生になる」必要がある。

大衆の小学生になるには、あふれるばかりの革命的熱情をもって、目を下に向け、丁寧に大衆に教えるを請わなければならない。毛沢東同志がいつも言っているように、われわれはけつして、知ったかぶりをして押し通してはならず、「下のものに恥ずかしがらずに教えるを請う」必要がある。まず大衆の生徒になってから、そのあとで大衆の先生にならなければならない。このようにやれるかやれないか、これは普通の工作方法の問題ではなく、根本的な立場、根本的な態度の問題であり、革命家の世界観の問題である。

われわれは文化大革命の運動のなかで、まず毛沢東同志の大衆観点を学ばなければならない。少なくとも同志は口先では人民大衆が歴史の創造者であることを認める。しかし、いったん実際活動にとりかかると、それを忘れたり、認めない。毛沢東同志のこの思想を掌握すること、これは頭を切り換えることである。このこと自体が思想上の大革命である。

大衆の小学生になり、謙虚に大衆に学ぶということは、一部の人の意見だけを聞くのではなくて、各方面の、それぞれ異なった意見を聞かなければならないということである。多数の人の意見も聞かなければならないが、少数の人の意見も聞かなければならない。

大衆の小学生になり、謙虚に大衆に学ぶということは、賛成の意見だけを聞くのではなくて、反対の意見も聞かなければならないということである。一般に、自分に賛成の意見は耳にはいりやすいのが普通である。自分に反対の意見はてんで耳にはいらない。しかし、実際には、反対意見に耳をかたむけることは、全面的な状況判断

にとって、しばしば必要なことである。

大衆に学ぶには、多く聞き、多く見なければならぬだけでなく、さらに多く考え、多く頭を働かさなければならぬ。つまり、毛沢東思想を指針とし、大衆の提供する多方面の資料や意見に分析をくわえ、滓をすてて粹をとり、偽をすてて真をのこし、このことからあのことへ、表から内面へと手をくわえ、整理し、高める努力をし、こうすることによって問題を発見し、事物の本質をつかまなければならないのである。このようにすると、もともと大衆のなかに分散していた意見を集約し、条理のある体系的な正しい指導側の意見に変え、その後大衆のなかに持ち帰って実施することができる。

われわれは、大衆の実践こそ、わが党が政策を決定する基礎であり、政策を点検する基準であるということを知らなければならない。大衆を離れてはなにごととも成功しない。

プロレタリア文化大革命の期間に、新しい問題、新しい事物がたえず発生している。各級の党組織と指導者は一貫して大衆の生徒になつてはじめて永遠に大衆運動の先頭に立つて運動を指導し、それを毛沢東同志がみちびく方向に前進させることができるのである。

中国の社会主義文化大革命（第六集）

1966年 初版発行

定価 30 円

出 版 者 外 文 出 版 社
（北京阜成門外百万莊）
 発 行 者 中 国 国 際 書 店
（北京 P. O. Box 399）

編号：（日）3050-1545

3-J-718P
 00022

